第五百十六號目次

◎社說
時代の酷弊自主自由を欠くにあり
孰か女學を隆盛なりと云ふ

◎隨感
艱難險道中の欣喜◎聖人世と相移る◎香油や◎天及び大人◎頼むまじきは人か我か◎基督の教は情死なり◎蛇とクロムエル◎叛臣傳◎夕ぐれの小疑◎月の愛相◎夏冬の衣

◎女學
新しき女學とは何ぞや◎家庭は莊嚴の道場なり◎一葉女史を憶ふ◎一枝の花（鴫沙）◎茶道の雅（石銘）◎理想の男子（婦人漫）

◎光瀾之觀
光瀾之觀◎大母の女訓……新井奥邃

◎雜錄
美術經濟論……青柳有美
某醫學女生の抱負……紹介者某女
ペンや開店の記……黑光女史
一掬の水……左琴女史
薩摩琵琶行（西幸吉氏の談）◎獨嘯錄（無美）◎檢校山登萬和君◎カーライルは英雄なり勝海舟也
◎武邊老人雜話

女子實學園開設の主意

立志餘りありて學資の給するものなき書生ほど、いぢらしきはあらず。不肖女學に從事してより此の方、斯る健氣なる女生に感動し、人生の不如意に歎じて、心密かに涙にむせびたると、幾度ぞや。但だ此同情の淺きにあらず、偏えに手段の乏しきを憂ひ、只唯些少の補助を供して、僅かに急を救ふのみに過ざりしに、今や、時運大に轉じ、女學其の類を増し、之が爲めに自活苦學の途を供へんと術や容易くなれり。方に、年來の所志初て伸ぶべきの秋なり。則ち、茲に、女子實學園を開設し、斯る女生の族にして、而も精神の最も確實なる、學才の必らず有望なるものを容れ、之が自營勉學の爲に扶助し、立志自助の念極めて篤くして、誦讀修養の途なきに困苦せる可憐の徒をして、殊に其些か委倚する所を得せしめんと欲す。然りと雖も、是豈に獨力の能く堪ゆる所ならんや、爲とに天下に心ある諸仁子の協同合和によりて、初めて遂ぐべき也。不肖竊かに感激し、殊に、且つ、彼等が成業の後、立身の途の廣く、且つ速に開通せんことを懇望して、彼等に同情を惠與せらるべき仁人を、初より廣く多方面に求むるの情、就中切なり。此を以て、朝野を問はず、教宗を別たず、特に爲ばら、同情を寄ねきに求めて、援助を四方に乞へり。冀くは、天下仁心の諸君、惻然として悲腸を垂れ、靜かに本園開設の主旨を吟味して、篤く義捐仁助を俯せ玉はんことを、謹んで懇請す。

明治三十五年六月

巖本善治

要綱四則

一 本園先づ寄宿舍を設置し、自活勉學の志ある女生に就き審査の後入舍せしめ、之に自活の方法を與へ、且つ勉學の途に就かしむ。

二 本園に入舍することを許すは、可成高等小學卒業以上の學力あるものとす。

三 假令ひ高等小學校卒業の學力なきもの又は一の學校に就學せしむる便方なきものと雖も、篤志方正の女生が爲には、成可く自活の途を開き、園外に於て寄托することを得せしむるの便を工夫すべし。之を本園附屬の事業とす。故に本園は初より廣く各方の同情を乞ひて、此等希望者の爲に其途を開かんことを祈るの情太だ切なり。

四 本園は別に奨學の爲に貧資の仕組を設置し、尤も有望なる女生の爲に自由に勉學するの方を得せしむることを希望すること亦切なり。是れ本園將來の發達に於て特に期する所の一也。

女子實學園規定要領

一 入園希望者は本人自筆の履歴書、志望書（修學の目的、將來の方針、理想等を記述したるもの）、健康の證明書及び信用ある人の推薦狀等を差し出す可し。

二 最初三ヶ月間を假入園の期とし、其後在園の許否を決定す。但し右三ヶ月間は實費の半額として毎月金參圓及び小使ひ（雜費）を自辨す可し。

三 各生修學の方法は其執務及び學力の如何を計りて、各自適宜に園長之を定むるものとす。

四 執務の方法は各生の長所に隨ひ、適宜に之を賦課す可し。

五 通信照會はすべて返信用の郵券を添附す可し

明治三十五年十月

東京巣鴨村明治女學校內
女子實學園
電話番町一〇〇一番

●女學雜誌定價表●

前金

壹冊定價	金拾錢
半年分前金	壹圓拾錢
一年分同	貳圓

代金は總して前金にて御注文ありたし◎年來引續き購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送することも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ亦た不本意ながら計算の煩はしき不得止次第に候間かねて御承知置被下度候

廣告料

一行（十七字詰）一回		前金拾錢
一段	同	三圓半
一頁	同	九圓

送金

送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

女學雜誌

第五百拾六號

明治三十六年六月十五日發兌

社説

時代の酷弊、自主自由を欠くにあり

道の道とすべきものは、常道にあらず。天、時に随がつて、寒暑春秋となり、寸刻も滯ふることなきを。何ものの迂人ぞ、船に刻み、流れに文字かきて、不變一定の形式を畫せんとはするぞ。今年今月今日今時、今分今秒の如き其時は、古に於て未だ曾て有らず、後に於て復た決して有らず。凡そ日の下に、眞とに再たびする者は嘗て決してあらざる也。古えに於て曾て吾の如き其人なく、後に於て決して吾の如き此人なかるべき、言ふを待たず。抑そも、今の我は、昔日の我にあらず、今日の我は、明日の我にあらず、我の我たる常なし、只だ變じて定なきを覺る、夫れ安くんぞ我の復たびすることを思はんや。

我や、眇たる一身を提さげ、流轉する五躰を組立て、息して生命を繼續し、動いて事業の勞僕となる。仰いでは、星辰の天に羅列し、朝たには消え、夕べには輝やき、雲に映じ、氣に乘じて、至玄至高なるを觀る。俯しては、坤土極めて厚く、藏むること深く、河川白く流れ、金砂妙えに混じ、草花開き、虫吟じ、露轉ろぶを觀る。眼を開いては、高天厚地の極まりなきを知り、眼を閉しては、幽冥玄邃の止まるなきを感ず。歴史ありしより以前、尚ほ榮枯盛衰あり、歴史ありて以後、歴史以外の歴史あり。人は生まるゝことと、死することと、救ふことと、殺すこととを、同時に執行し、未だ曾て止めず。嗚呼人生とは、何ものぞ。

人生、何ものぞ。孰か其の全豹を知り盡すことを得ん哉。而して尚ほ之を知らんとして、休せず。一斑を窺がつて敢て自から得たることなす。抑そも、全たく知らざると、稍や知れると、其の差、毫釐のみ。而も、人や只だ毫釐の命に寓すれば、此

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

般の智識を以て即はち所云ゆる智識とするの外あらず。智識そも〳〵此の外に望むべけんや。

但だ夫れ、第一層に泥着するものあり。第二層に穿入するものあり。更に深く第三層に入るものあり。尚ほ之に安んぜざるものあり。其の淺きと深きと素と大差あるにあらずと雖ども、段を異にするヿは即はち免かれず。其の稍や深くするものに名けて、眞相に入れりと言ひ、其の稍や淺くするものに名けて、皮相に止まると言ふ。夫れ、皮相も一の眞相なり、眞相も亦た一段の皮相に過ぎずと雖ども、人は、詮究の度を深くするに随がつて、安心敬意の度を高くするが故に、淺きは遂に深きに及ばず。深きもの、寧ろ重んずべき也。

見よ、理解なるものゝ、遂に何ものだも理解し了するヿ能はざるを。理解とは、事實を羅列して、其列べ方を調へ、之に幾何學的の線あるヿを見めしたるに過ぎず　理解し去りたる時、即はち事實中の事實を見る、遂に事實の外に何ものをも見るヿなし。事實を事實として信ず、遂に依然たる盲信に過ぎざるのみ。而も、數段數層の分析解剖を經て、其の淺きより深きに、離れるより純なる方に近づく時、歩々、理解し得たるヿを自覺し、中心快氣あり。即はち此の快氣に名けて、理解し得たりとするの安心と號す。

見よ、事業なるものゝ、遂に何等の新らしきヿを生ぜざるを。流に溯ぼりて舟を行るを得ず、風に逆らつて塵を飛すを得ず。よし得たりとせば、別に他の流風によつて乘じたる耳。抑そも、人の成す所、如何んの自由意思かある。渠れ或は好運の寵兒となり、或は逆境の繼子となる　歌ふ所と、怨む所と固より同じからずと雖ども、遂に亦た時代流風の余響に過ぎざる耳。然ば、人の成す所遂に如何、渠到底に自由自主の意思なき乎。夫れ、盆に載せられたる小蟻は盆以外に出づるヿ能はざれども、盆の内に於ては彼等自由に奔走驅逐しつゝあり。人豈に絶躰に自由ならんや、たゞ束縛せられざるヿを自覺する時乃はち自主自由なり。人間、此の境界に居て、其の最善最好最美最利なりとする所ろを實行す。其の實行は、天地に新らしき物を生ずるヿあらざりしとするも、而も遂に新らしき接續を結了せり。之れ亦た新らしきもの也。人や遂に事業を爲ざるヿなし。

果して然らば、人、其の生れたる國と、活ける時代との爲に

其の現在の要求に應じ、最とも善しと信ずる所の事を斷行するに於て、人生の價値あり又理由あることを覺る、但だ夫れ其の最とも善しとする所ろのものを誰に就いて質さんや。よし之を質すとするも、遂に誰によつて決定せんや。古人は我と同じき時に生れたるにあらず、安くんぞ能く我の今に處するの道を辨ぜん。たとひ能く辨じ得べしとするも、彼亦た其言ふ所を再たびすること能はず。彼の言へりし所は、彼れの時に於て彼の爲に言ひたるのみ。之を我友に問はんか、我友は既に我にあらず、安くんぞ我の如く我事を知ることを得んや。我は我が參考とすべき幾多の金言を聞くべけれども、之を決するものは、遂に我外にあらざる也。我の外に我なし。我は天上天下に於て只獨り尊ときもの也。

此を以て、我は、我當代に於て、我が當に爲すべきの道を決定する所以を覺了す。此の覺了假令ひよし完きにあらずとするも、世に於て人の爲す決定は此の外に完きことあるなし。我は斯く信じて毫も疑はず。此の信あらゆる百不可に勝ち得て優に長あり、此の不疑一切の障礙に勝ち得て必らず徹す。假令ひ聖賢は幾多の更に偉大なる方策を與へ得べくとも、其の大なるは、天の我よりも大なるに似て大なり、我が大とするにあらず、天の大なるも、一草の小さきも、草は草に於て其の大を悉くせり。眞乎の大、此の外に何かあらん。もし天を以て大なりとせば、天よりも大なるものある時、天を小とする乎。然り、天を小とすることを得ん、而も天は自から小なりとするを要せざる也。

嗚呼、善惡眞僞、果して何如ん。遂に我に於て最後の決定を爲すの外、何の標準かあらん。村學究、忽まち此の説を評して、ソハ何々學派の説なりと言はん。然り、何々學派に似たるともやあらん。左れど、似ると似ざるとは、之を是非するに於て何の價値なし。似るものは似たる也、似ざるものは似ざる也、遂に其以外に分別あるなし。要は、我、我が決了を如此くせり、村學究其人の所決果して如何んと問ふべき耳。見よ、萬卷の讀書、遂に得たる所、何事ぞ。十年の修養、遂に達したる所ろ、如何ん。我は其人に問はず、其人自から問へと若か言ふ。

悲しひ哉、吾邦の同胞。常に久しく他の所見に動かさるゝことを止めず。曰く、二千六百餘年の獨立國、未だ曾て他の兵力

に屈服せずと。而も、兵力に屈せざると、智力に屈せざると優劣果して奈何ん。昔しは、哲人を縛するものあり、哲人曰く、汝吾躰を縛するも、能く我が我を縛することを得んやと。又、昔し、哲人を殺すものあり、哲人曰く、汝吾肉を殺すとも、能く我が我を殺すことを得んやと。聞くもの之を壯とす。而して、我が神洲の同胞は、其の誇る所を同ふせざる也。既に思想に於て縛せらるゝ所あり、既に信念に於て駕御せらるる所あり、既に政躰社交に於て叱咤せらるゝ所あり、而して、僅かに尺寸の地を割かざるを以て誇りとなす。百姓あり、其穣讓の田地を固有するを専一とす、是れ邦家最上の事か。熟らく今の所云ゆる文明なるものを見る。文明とは、たゞ世界の流行に過ぎざる耳。遂に何の優所あらんや。何故に、立憲可にして、専制不可なる。何故に、洋服美にして、束帶醜なる。抑そも是れ兒戯中の喧爭に過ぎざる也。支那に在ては、戰國時代を野蠻なりと云ひ、西洋に在ては、戰國時代を外交と云ふ。野蠻と外交と、立憲と専制と、遂に異なる所、何事ぞや。

若し、達觀せば、大率ね皆な一なり、何の優れることと、劣れることあらん。而して、尚ほ優とし劣とする所以の懸隔何處より來る。現に、我邦の屢ば他の後えに屬し、其の屬することを以て開化とし、以て支那にすら誇らんとする何の處より來る。曰く、他なし、個人、個人的自尊あること少なく、其の所決裁斷する所、常に他を待つて初めて定了するの兒態を改ためざるに由る。

凡そ、惡を爲さゞるものは、善を爲すことなし。其の惡とは、人の見て惡とする所。大凡そ、人の見て惡とする所、而も自から信じて斷乎として善なりとし決行する底の意氣なきものは、其行ふ所ろ決して善にもあらざる也。何んとなれば、是れ自信自決の故によるにあらず、但だ他に追隨し、他の善しとするが故に善しとして幸ふじて決行したる、一種の虚榮者、又一種の追隨者に過ぎざれば也。

嗚呼、今の外交や、知るべき也。彼、斷乎として何云ゆる惡を爲す、其爲す所ろ彼が自國の福利の爲にする也。彼何の惡しきとせんや。而も、我は之を評して惡なりとし、其の惡なりとする所以を飜して、我は自から如此くす可らずと自戒し、たとひ之を爲すとも戰々として自から辯ず。如此くして、我

は一種の道徳論者たる間に、外変の壓迫は、潮の寄するが如く寄せ、呑まざれば止まず。遂に溺るゝもの泣いて曰く、天道、是か非かと。愚かなる弱きものよ、如此きは世に於て劣敗すべきもの也。

嗚呼、善の善たるは、其の善とする所以の信念にあり、善其ものの純善なるにあらず。故に、善を見て善と爲しつゝ而も之を善として死を以て爭そふ能はざるほどの薄信あらば、寧ろ惡を惡なりと知りつゝ、惡なれども爲さゞる可らずと自から信じ自から安んずるものの寧ろ善なるに若かず。在昔より、君子の屢ば倒れて而して天の泣かざる所以、玆に存す。天豈に道徳論者を求めんや。

此故に、三十年の非を覺りたるものあらば、三十年間の非なりしにはあらず、之を非なりとせし以後、初めて非なるものとなれり。若し直ちに是なりと信ずる所の確信物を以て之に代へば則はち可ならん。今の志士、立憲政體に厭き、國會に倦み、教育に失望し、實業に悲しめり。而も、此の不可なりとせらるるもの不可なるにあらず、之を不可なりとして自から疑ふに至りたる薄信即はち不可なる耳。公等もし今ま新しき信仰と、新らしき理想とを起さば、今の濛々たるものは直ちに凛々たらん、亦何をか疑はん。

誰か女學を隆盛なりと言ふ

誰か女學を隆盛なりと言ふ。吾人を以て之を觀ば、毫も其隆盛なるを信ぜざる也。

若し、女學校の新らたに設立せらるゝと多きの故を以て。又若し、女學生の人數の大いに加はり、婦女雜誌の部數の夥たゞしく賣れ、貴婦人の名に依れる事業の盛んに流行する故を以て、女學を隆盛なりと言ふものあらば、吾人は假りに之に贊同し置くべし。

然りと雖ども、眞とに事物の本相に懸念するものは、かゝる外觀の假相によりて滿足せざる、言ふを要せず。

試みに問へ。今の女學と、古の女學と、何の變革かある。もし、維新を以て、明治政體の起源とせば、今の女學に何の維新かありし、今の女子教育は、依然として古の女子教育なり。但だ少しく異なる所は、海老茶の袴を着たる事、椅子テーブ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ルに腰かくる事、ヲムレツ、ビーフステーキの料理を學ぶ事、外國語を囀づる事等、少々の改良に過ぎず。他に、何の新らしき事、即はち何の革新かありしぞ。

夫れ、明治維新の改革は、『四民同等』の新思想を發揮したり。新日本の男子教育は、『開發及び興味』の新主義を發揮したり。而して、今の女子教育には、何の新らしき生命と、何の新らしき種子とが、今の女學界に附與せられたる乎。曰く、賢妻良母、曰く、家庭、庖厨、裁縫と。此等の事、毫も昔者と異ならざる也。而して、昔者にありて其の粋となり精となりたる當年女學の生命は、今反つて亡然として失せ、更に代て之に補はんとするものすら無し。見よ、昔の女子教育は、精神的教育なりき、更に實行主義の教育なりき、斯して之が生氣となり、之が獻身的の生命となり、之が宗教的の刺激となりたる一種の信仰は、今反つて亡び、如今之に代るものなし。左れば、今の女學を、古の女學に比較して、毫も革進したるものを見ざるのみならず、寧ろ其の退歩したるを見る。之を安くんぞ、女學の隆盛と言ふべけんや。

嗚呼、今の女子教育者。其の理想、其の主義、其操守、果して如何ん。公等は心中確乎たる成見ある乎、公等は女性に對し明白なる理想ある乎。見よ、其多數は、凡俗の好尚に追随し、其の批評を恐れ、紛々たる要求に奔走して、只偏えに世上の賞賛に應ぜんとす。公等は教育者に非ずや。教育者にして世上凡俗の好みに應じ、其要求に動かされ、たゞ命是れ聞いて其注文に應ぜんとす、而して是れ新男新女を養成するの教育者なる乎。

吾人不肖と雖ども幾分の慨あり、豈に曲げて輿衆の所望に應ずるを以て是れ専要と爲すを得んや。小見を開きて大方を觀る時、世上の女學に毫も新らしき生氣の勃興したるを見ず、反つて澤々たる妙齢姉妹を壓し、枯槁せる腐木の形式に填入し、以て女性の美、女性の神を殺さんとす。安くんぞ憤せざるを得んや。吾人を以て之を見ば、今は、明治十七八年、女學新たに起らんとして而して邪説反て横行したると畧ぼ相似たり。吾人不肖と雖ども復び一臂を揮ひ、玆に新紙を披ひて更に奮鬪せざるを得んや。

洛陽親友如相問
一片氷心在玉壺。

随感

○患難壓迫中の欣喜

患難に活き、安樂に死す。吾がこれ迄に生長せし由因を考ふるにも、眞とに身の爲になりしことゝては、悉とく難儀によりて得しものなり、樂によりて得しものの今に能く遺れるはあらず。左らば、現在壓し來る患難の面てに突立ち、之あるを光榮とし、之あるを感謝して、古人の謂ゆる欣喜雀躍する迄に至らんとするに、さすがに氣力の足らざるを覺ゆることあり。之れ何の故ぞ。仔細に自から探求して、深く根柢より改築する所ろなかるべからず。偶たま、浮華空大の伽藍を結構すとも、人間詮ずる所ろ遂に何をか得たる。

○功成名遂而身退

功成り名遂げて而して身退くは、天の道なり、と。眞とに、天の道なり。天道、何處にか、業成り事遂げて而も尚ほ退ぞかざるものある。花開きて色好く、人之に歌はゞ、花則はち凋落す、果實をして代らしめん爲なり。大人之に則とり、功名擧るの後ち直ちに辭去す、是れ當に爲すべきの道なれば也。夫れ、爲すべきの道なれども、人多く之を爲さず、其人も亦た爲さで已みなんこと反つて易し。然るに彼尚ほ勉强して敢て此道を實行せり。天地人生は、此の新らしき殊勝に對して更ために報酬を成すことあれども、かの成功遂名に對しては別段の報あることなし、成功遂名すでに當分の報ひなれば也。人多く此の理はりを念はず、長く功名盛譽に當らんとして則ち除かる 功臣の後ち大抵殺さるる所以、盛名の決して長からざる所以、此にあらずや。何すれぞ人、之を恨むの痴態をか爲す。

○聖人世と相遷る

人は少年の痴氣を去らざる可らざれども、青年の若氣は何時迄も失なふべからず。聖人世と相遷るの秘義こゝに存す。一段の功業則はち了り、一代の趨勢則はち去り、又復更めて第二代の生命に呼吸する所以、只だ常に青年の氣を失なはざれば也。天地もと生々たり、老物を要せず、老物は只だ自から殘留するのみ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○古池や

歴史は同じき事を繰返す。人の只だ同じきことを繰返せばなり。襁褓よりクレードル迄、シーソウより棺桶まで、人の能く新らしき事を念ひ新らしき事を成すもの、幾何ある。理想は久しからずして俗化す、之に名けて經驗と云へり。信仰は久しからずして平凡す、之に名けて大悟と云へり。就中、わが同胞をもて甚しとす、何すれぞ其の奇氣卓拔を失なふことの迅速なるや。夫れ、人は斯くして生れ、斯くして學校に入り、卒業立身して而して亦前人と同じきことを繰返す。日の下に新らしきものなく、新らしきものも遂に新らしき事なし。人間生々の意義何處にある。嗚呼人よ、其の靈魂を重んじ、其の自由を歌ふに先だち、公等何の殊別特自ありやと問へ。古人句あり、古池や、蛙飛込む水の音。人間能く蛙たらざるもの、誰。名聲功業、たゞ水の音たらざるもの、何。世は到底、深き古き古池のみ。

○天及び大人

大人の爲す所を觀よ。智德一味に期し、損益同躰に和す。若し夫れ直情徑行する所と雖ども、八面の氣鋒十方に射出し、上下左右、同一時に幾種の理解を含む。就て其跡に鑑みんものが、表裏明暗の解釋を下して而も容易く其の要緊を悉くしがたき所以のもの、斯の如くなれば也。看よ、大人既に然り、大人が師父たる天そのものの爲す所を觀測して、たゞ一種一色の哲理に解了し去らんとする輩の如何に徒勞なる哉。天は大人よりも大なり 豈に大人の爲す所よりも更に單一淺泊なりとせんや。

○賴むまじきは人か我か

つくづくと觀ずれば、人ほど、ゆかしきものはなく、又、人ほど、やさしきものはなけれど、又の時、更めて思へば、人ほど、あぢきなく、人ほど、つれなきものもなし。二身一躰は愚か、二念一心と思ひし間柄も、知らぬまに、追々と薄らぎ離りゆくもあり。此人はと思ひしものの、時てふ隔ての雲に見え分かず成りゆくもあり。人は能く覺うるものなれど、亦、よく忘るることあり。歳月の流れは、人心の思ひを流し、日月の明暗は、心の明暗を促がすやらん、さてさて賴むべく

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

して頼むまじきは人なる哉と怨じつゝ、ふと我、吾身を省みて恥ぢらふらく。三千年前、死せし人をすら忘れて歸依渇仰し、之に命まで献げんとする、亦人にあらずや。人の向背は人にあらず、只だ我にあるを知らずやなど、自から叱して、夜深く獨り眠る。

○基督の教は情死なり

基督の教は情死なりと、ふと吾が言ひ出しを人の奇しむものあり。さて〳〵情死と云へる美くしき文字も、久しく忌はしうは成りつる哉。獨一絶對の御神、わざ〳〵三位に顯はれて又人を造る、情けに動き玉ふ所ありてにあらずや。基督、身を燒く斗りに衆生を愛し、遂に其が爲に身を殺し玉ふ、麗はしき情死にあらずや。夫れ、情死は死にあらず、同もに壓迫の裏より脱して、別に長久へに活きんとする也。基督の人を救ひて同もに永遠に生きんと爲し玉ふ、殊に情死の粹を現ぜり。以下、代々の教父先哲みな情の爲に死せり。われ等も亦た情死を爲し得るほどの淸き聖なるものとならんとこそ祈り居るなれ。

○蛇とクロムエル

蛇を惡むものは多し、好むものは尠し。或人辯じて曰く、若し其躰を解剖せば、腹中に夥たゞしき毒蟲を呑み居たるを見ん、斯斗り人間の禍を除き與るものかと氣附き、初めて飜然、蛇を愛するに至らざるもの、亦尠なしと。夫れクロムエルの解剖は、數百年後、初めて精細に知られ、今は人に好かるるものとなりたり。

○叛臣傳

我國の歴史研究にて趣味あるは、叛臣傳ならん哉。相馬の正門、出羽の貞任より、時政、尊氏などに至るまで、稍や大陸的破格の人物として面白げに見ゆる、叛臣の中に多げ也。近ごろは、南洲先生など、是非一と度は叛臣傳中に入るべきなり。人もし斯翁の叛臣たるべき性格を知らば、古の叛臣を推考するに於て必らずや余師あらん。

○夕ぐれの小疑

夕ぐれに、ふと眺むれば、蒼煙、麥壟の間だにわだかまり、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小さき流に、蛙の聲きこゆ。耕やす人は、仕事了れりと滿足して、家に歸るらん、浦山しき哉。吾務、畢ると感じ、又吾家なるものありと感ずる人ぞ、多福なれ。鷄は、鳥舍に入りて、少しくさゝめき、小鳥は梢にねぐらして、相接して推す。村の童幼たち、日の暮るゝも知らで盛んに遊び、之を見て笑ひつゝある大人もあり。犬之に戯むれ、人亦た之を弄ぞぶ、いよ／＼戯むるるは、いよ／＼樂しきなるべし。吾、悄然として獨り歩し、遙かに染井の森かげを見る。雲白く、森黑く、烏飛んで、墨數點を散らす。一望せる平野、草靑けれども、風冷やかに、暮色漸やく暗し。月少らくして登れども、人なく、色澄めども、露未だ白からず。吾ひとり吾身を顧みて、天地を小しと思ふ、人を少しと思ふ、世をさびしと思ふ、吾家何處ぞと思ふ。たゞ／＼不思議なるは、吾子等の愛らしく、吾門下の忘れがたく、吾友の信切なるにあり。煙突の森の間だより見ゆる、卓然として疑はずして立り。

○目の愛相

眞に惡らしと思ひし人も、顏を合せて其目を見れば、惡人とも見えず。忌な奴と思ひし人も、其目を見つゝあれば、左程にも無くなるものなり。ふだんの目は良心に通じ、こゝより靈火の烟を吐きつゝありと見えたり。然し乍ら、邪念惡想の氣焰の反射もまた此外には無きとゆへ、折々は面白からぬ現象もあるべし。然しそは寸時瞬間の事なり。早取寫眞にもうつらぬほどなり。

○夏冬の衣

夏の衣は、薄くして蟬の羽の如し。冬の衣は、重くして獸の革に似たり。公平中庸を旨とするよしの某、二つの厚薄を比らべ、二つの輕重を權り、二分して折中の衣を裁ちけり。所云ゆる大公至正とは、是れか。抑そも、冬には厚くし、夏には輕くするゝ、中庸にあらずや。見よ、人は時の勢を知らずんばあるべからず。

本號休刊の後なるをもて、新書批評、時事雜報の二欄を欠く。次號より隨時新撰の料によりて適宜に編述す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

新らしき女學とは何ものぞ

●新らしき女學とは何ものぞ。西洋料理を敎ふることにあらず。會話に上手になることにあらず。女をハイカラにすることにあらず。昔に無くして、今に起さねばならぬ一の新らしき者を女學に注入すること、即はち新らしき女學とは言ふなり。

●此の新らしきものとは、何ものぞ。女をして、其の古き束縛より脫せしめ、其の古き卑屈より高まらしめ、其の自から輕ろんじ、自から賤しみたる奴隸心より超化せしむること、即はち其の新らしきもの也。

●凡そ、敎育には限りあることなし。限りある敎育は、眞の敎育にあらず。敎ふるものに、『彼は云々より以上には昇ること能はず』と限り居らんには、かゝる敎育者の手より大なる人は出でがたし。又、敎へらるるものに、『我は云々より以上には上ること能はず』と限り居らんには、かゝる學生の間より大なる人は出づ可らず。たとひ、結果の實地に於ては、左して思はしきほどの進步はあらざりしに歸すとも、此すら尙ほ初めに於て大に望を屬したればこそ得られつれ、初めもしも之を限らんには、抑も此丈けの結果すら尙ほ得られまじき也。

●故に、女は云々のものなりと、初より限を置き、人間短慮の淺き見識を持ち乍ら、どうせ大したるものに爲るまじなど思ひ搆へて之を敎へんには、左なきだに伸びがたき女の性の尙更に發達することなし。かゝる見地を以ての女子敎育は、決して女を大きくすることを得ざる也。

●笑止なるは、今の國文學者など、一代の講究、源氏物語の文法を穿鑿することに了らんほどのものが、飜つて女は云々のものなりなど論つらひ、大したる誇り貌するなど、笑ふに堪へたり。彼は紫女が百分一にすら及ばずして、而も女の力倆に就き大言しつつある也。

●夫故、女學の革新とは、女學校を建ることにあらず、其の學科を多くすることにあらず、躰育を盛んにすることにあらず。但だ古の女學に無く、古の婦德に無く、古の女道に無き、自主自由、自信自發の新生命を吹き入れ、彼女をして天上天下惟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

我國體の大光榮を赫かしむるにあり、此氣、彼女の心中に充滿ちて、彼女が自から祈るに天地自然に融着するに至らしめずは、我女子教育や根抵なきもの也、一時の隆盛、何んかあらん

●今の日本の女子は、封建時代の士百姓の如し、何となく、自から下げすみ、自から卑下し、口には兎角に言へど、其實は矢張り、男に及ばぬと恨み居るもの也、此の卑下するとは事實なれども、其故にて女が劣り居る證據にはあらず、否な長く劣り居らねばならぬ證據にはあらず、かのお上の事を非議するとを大惡の如く心得、町人、お侍ひには敵はぬと思ひ居りたる百姓の中の大百姓なども、今は多額納稅議員と言つて、昔の士族が引く車に乘つて意張り居る世の中、女は到底、いつ迄も十分の人間にはなれぬものと思ふなど、以ての外の間違ひ也

●夫れ、其鉄は未熟なれども、既にしたる後に大きくならず、種子は醜くきものなれど、地に播けば後に大木ともなる也如何に上品なる躾も、たゞ飾りにするほどに與へたる教育は、長年其まゝにて、其以上には伸びがたし。直ちに人の心中に

播きたる生命ある種子ならば、久しふして長じ、遂に驚ろくべき大幹巨木となるべし　學校にある數年、教授するとたゞ數學科に止まるうちにも、心地の根抵に或一種の生命を與へ置かば、結果は意外のものとならん。教育者たるもの丶大小は此處に於て分る也。たゞ學校の壯大と、生徒の多少など考ふる俗物的見識にて、何事を爲さんや。山鹿甚五左衛門、赤穗に客たるとき、教ふる所あり。去るに臨みて曰く、吾數年間の心血は、他日何事かに於て出現すべしと。果して元祿の天地を震動し、千古の義心を激勵したる四十七士は、此の教育の生命によつて育成せられたり。

●左れば、今の女子教育の隆盛など言ふとも、依然たる形式的、依然たる舊精神ならんには、何の變りたるとも、何の進みたるともなき也。果して新らしき女學が如何ほどに行はれつゝありや、是れ今の女學界の志士が刮目して審査すべき問題なり

●嗚呼、うかれたる女子教育者よ。流行になびく女子教育者よ。生徒多く、收入多く、商賈になると言ひて時めく女子教育者よ。一盛一衰の道理も知らず、今の大伽藍が遠からず化

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

物屋敷の如くになるとも知らず、たゞ時代の狂を追ふて悦こびつゝある女子教育者よ。卿等、何の新らしきことをかする。而して新らしきことの佳きことを知りても、今の評判には不都合なりと心配して尙ほ之を隱しつゝある女子教育者よ。既に教育者と言ひて、卒土高天、何ものにも束縛さるゝことの入らざる先生其人なるものが、いつも〳〵人に屈し、世論に屈しつつ、生きて何の新らしき種子をも播かざる女子教育者よ。お雛サマを造り、人形をつくり、西洋人にかぶれ、ハイカラにかぶれ、文明とは西洋の事と思ひ居る女子教育者よ。ホームと言ひ、婚姻と言ひ、交際と言ひ、英語と言ひて能事了れりと思ふ女子教育者よ。何んぞ翻つて自から撿し、吾果た何の新らしきものを世に貢献するやと問へ。新らしきものを貢献せざるは、教育者にあらざる也。

家庭は莊嚴の道場なり

今の人、家庭に和樂團欒をもとめ、英國人の所以ゆるスヰート、ホームに爲て、天國の摸型を作せんと欲するもの、素より不可なし。從來、殺風景にして、「汝の敵は汝の家のものなるべし」と言はんほどの惡しき家庭多かりし國土に於ては、ホームの和樂を說くこと、亦た適切なる良治術に相違なしといへど、人よ誤まつて之を絕對の眞理となし、家庭は只だ幸福にのみすべきものと誤解すること勿れ。家庭は、單に休み場所にあらず、亦、學園なり。逸居團欒して樂しむは、其一つの用なれども、同もに苦しみ、同もに痛憂して、之を理想の道場となし、人間進化の必要器關として、極めて之を莊嚴にせんと、他の一つの至大なる目的なり。

凡そ、人相ひ同居する時は、互ひに辛棒勘辨して、各自に我儘を制裁し、而して後ち共樂の好結果を得べし。初めより、幸福を得らるるもの、喜樂を得らるゝものと待構へ、只偏へに家庭の樂しきことを期する時は、人々の要求互ひに相戰かひ、交も我が所望を主張して毫も讓らず、爲めに意外の不結果を來して、一同に不平不滿を感ずるに了るもの也。今の新家庭を作るものが、大率ね存外の不結果に歸する多き所以、只だ此の一理に存す。

人亦た切りに外國人の家庭の幸福を說けども、是れ其の外面

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の美に眩惑して、裏面の眞相を知らざるに座す。外國人の家庭は一種の見せ物なり、公開して客に示し、以て得意となすこと、我國從來の家庭が、他に向つて密閉せられたるの比にあらず。外國人は、交際に長じたる國民なり。又、男女ともに交際することに慣れたる國民なり。故に、其家庭の狀況を他に示すことを一の得意とせり。是れ其の家庭が如何にも樂しげに見ゆる一大元因にして、其實相は必らずしも然らず。彼等が人に見する外部の好狀態を見て、直ちに以て其の眞相と爲すべからず。

凡そ、心得なき男女の同もに集りたる所ろに、眞の平和あらん筈なし。眞の平和は、修養あり克己ある男女、の間にのみ生じ來ること、古今東西つねに然り。左れば、家庭を平和にして、其和樂を希望せば、必らずしも、西洋風にあらず、必らずしも昔し風にあらず、たゞ今の男女の今の心にあり。若し莊嚴にして謙虚なる、克己にして犧牲なる心を以て相對し、而して互に相ひ敬し相愛せば、如何なる茅屋の下、如何なる貧小の室に於ても、天國の光景の現ぜざる理あらんや

一葉女史を懷ふ

德富蘆花、本鄕婦人會の需に應じ、去日、「一葉女史に就て」と題し演說せらる。先づ、甲州東山梨郡の一寒村を說き起し、或る年の秋のくれ、玉蜀黍は軒の壁一面に吊され、道の傍に蓆、所せまき迄敷かれ、處々織はたの音を聞く所ろに出て、玆を一葉女史の故鄕と聞き、如何なれば、斯る偏僻に天才の種のこぼれ居しやと疑ひし感懷を述べ了り、以下徐々として、女史が作の秀逸と、其天禀の燦めく所ろとを仔細に解叙せられたり。

曰く、女史が觀察は非凡なり、而して、其の撰擇は極めて美術的なり、女史は其の稟質に於て甚はだしく聰明なりしならん、而して其根抵に於て、豁拔なる意氣地を潜めたるならん。或人は、當代の淸少納言を以て比するものあり、此も亦た不可なるにあらねど、余は寧ろ式部を以て更に近く似たりとせん。式部が、あれ程に成功して而もあれ程に婦德を守り、千波萬瀾をくゞり乍ら、巧みに遁つてのけし、女らしき女の生涯こそ、納言に優りたる氣力を要せしならん。余は寧ろ、式

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

部こそ納言に優りて意地悪るき方なりしならめと思ふ　一葉女史が氣轉のきゝたる、粹にして江戸子氣質に激するあたりは、甚はだ納言に似たる如けれど、大躰は式部の方に近しと言はんこそ適當ならめ」と。說き去つて此に到り、觀察最とも曲微を極はめたり。

又曰く、大凡その作家は、兎角に、芝居氣を離れがたし。吾等が結構を案じ筆を握るときなど、やゝともすれば、其邊りに拍子木の聲をきゝ、見物の顏を見る心地などすれ共、女史が其の作に望むときは、毫もかゝる山氣なく、作其もの丶中に入り、身其主人公となり、直ちに人生其もの丶呼吸に通ず。故に、亦其の作を讀むものをして、小說を讀むとは思はしめず、直ちに人生其ものを見るの感あらしむ」と。これ實に小說的天才の精髓を道破して、最とも要緊を得たる所なりき。

曰く、一葉女史が傑作は、其全集中の五六篇にあり。其作は、博きにあらず、長きにあらず、多きにあらず、然し乍ら、極めてインテンス、極めて眞贄。吾等をして殆んど、其血を見るの感あらしむ。女史は早く死し、其作は多からざりしかど、尋常の男子が、百年の間にだに爲し得ざる所ろを爲し了られたり」と　何等有力の弔辭ぞ、

曰く、女史が人生觀はいかなりし乎。吾等、其の作を讀みたる時の感情より言へば、其一篇を閉して後感ずる所は、四面暗黑、人生慘憺、たゞ何處よりか頻りに「哀痛」の聲を聞く如き思ひせらるゝ耳。女史自身の人生觀は實に斯の如くなりしならん」と

蘆花子、此の日の演說は、凡そ演說と云ふものに於て、最初のもの而して恐らく最終のものとせり。其聲は低く、其態度は粗朴、言々毫も修飾せざる裏に、深き同情と、眞贄なる觀察とをこめて、一時間半の長演說に、吾人をして傾倒せしめ、終るとの尙ほ早きを憾ましめたり。

聽衆中に、一葉女史が令妹あり、又友人あり。友人中の馬塲孤蝶子、起つて曰く、吾等今ま感慨に堪えず、乞ふ二三を加えて、一は謝し、一は辯ぜんと。

其の言みな一葉女史が確實なる傳記として後に存すべきものなりしが、今略す。孤蝶子、他日自から記して世に公けにすべしと言はれければ也。

此夜斷腸人不レ見
起行殘月影徘徊。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一枝の花

鴨夢逸人

新らしき一枝の花を挿はさむ。其の如何にも無雑作なる所ろに無限の趣味あるが、所謂ゆる『茶花』の極意であります。遠州、石州、さては生の坊など、皆な夫々の長所がありまして、何れを貶すなどは宜しくありませんが、眞理を探究する人の机のほとり、事業に忙がはしき人の事務室の中、庖厨に事しげき婦人のお居間の端、又は質素清潔の小座敷の床の眞中などに、極めてアッサリと挿れたる清新の茶花は、また一入の風情と思はれます。花は一枝一輪に其妙諦があります、必らずしも多く取まぜて、色彩を製造するには及びません。一輪の花、否、半輪の蕾でも、其美に限りなきものです。此處の趣きを見めすが、茶花の主旨で、花の靈は格別に感謝するとであらふと思ひます。但し茶花には清新なるを好みます、過ぎたるよりも若きを愛します、随つては、朝々露深き内に一枝一輪を手折りて之を挿はさみ、翌る日は取つて棄るとも、ありますが一日の專愛は十年の浮氣に優るとして、花の靈は之を惨酷とも思ひますまい。花に代て保證します

茶道の辨

山下石翁

近頃、茶が流行りますが、只だ其の形式のみで、一向に、茶道と云ふものが行はれませぬ。其かみ、千の利休が教へたものは、即はち茶道で、一と通り卒業するが十又二年、中には一生かゝつても免許は得られなかつたと申します。其の主として學んだものが、今と異なつて居るとが分りませう。茶は、心を風雅にし、姿を簡樸にし、天地の寂味を味はひて、香氣心烟相ひ一致する所ろに思ひ到らねば、一向に妙味と云ふものが分りませぬ。但だ式作法に拘泥する斗りでは、彌よ熟して彌よ腐れるの喩へであります。茶をよく學んだる人は、質朴の樂しみ、眞摯の味はひ、人生のサビ、色の落付などが自然と分つて來て、人物が高雅になります。取わけ騒々しき女などが、其の淺墓なる趣味を醫やすには、茶は眞とに恰好の藥かと思はれます

今のハイカラ先生方にお勧めしたきは、此の茶道であり升。キラ〱した才子方や、上ッ調子の事業家などにお勧めしたいのも、亦此茶道であり升。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

理想の男子（二）

婦人連

製品は、注文によりて出來、物産は、需要によつて起る。古人曰く、士は己を知るものの爲に死し、女は己を愛するものの爲に飾ると。士が知られて悦こぶ相手は、必らずしも君主にあらず、心に秘め置く艶なる知己亦た是れ也。左れば、『女など』と壯言豪語する英雄連も、存外、女の注文に聞くと多し、亦是れ馬鹿にすると能はざるものと、晩れ乍らに感心し、折々、懇意にする女人の正直なる告白を聞きたるものを筆記し、左にかゝぐ。尚ほ冀はくは他の婦人方が、續々衷心を開露して寄せ玉はんとを、善良なる商品を作出する濟度の仁術なり

◉女の理想とする男子は、男らしき男であり升。事を處理する時は、熱血を揮つて當り、主義を貫ぬく爲には、萬事眼中に無けれども、時として故郷遠棲を思ふの涙にむせぶ快男子であります。随がつて、物事に執着せず、立流に失敗して、失敗に勝利し、思慮よりは、決斷に富む。之が、男の中の男、男らしき男であると思ひ升。

◉私は兎角社會が狹いので、男子なんどを廣く知る余地がありませんし、それに私は、人間を男とか女とかに區別するとを好まないので、單に人物としては、理想もありますけれど、殊別に男としては理想がありませんでした。然し、お問を受けて、今更になつて心に尋ねて見ますと、成程、理想が無い事もないのです。それで、其の考へ出したものを申しますると、私が理想とします男子は、智ある人、即はち智者です。ほんとふの智者です。デ、智者と云ふより外に、私には説明が出來ませんが、早く云へば、大惡人ともなれる丈の土臺のある人、又今日の言葉をかりて言へば、法律手段に係らぬ人、やり方を見せないで仕上げの甘い人を指すのです。世の中に僞を爲ない人は少ない故、僞を惡るいとは思ひません、寧ろ良い時もあるかと存じますが、直きに言ふた口の乾かぬ中に現はれる様な虚は嫌いです。之に反し、あらはれぬうそが出來る人、即はち思慮ある人、之が私の言ふ智者なので、所云ゆる才子とは違ふのです。

◉どちらかと申しますれば、お顏色の惡いよりか善い方が結構なとは、申す迄もありませんが、其實、女は夫れ程、美男

な方を好くものではありません。押出しが立派で、人中へ出て、凜々しいのは、如何にも心持が善ふ御座い升が、夫は決して美男と申すのではありません。尤も、年の若い内で、まだ世の中の事を眞面目に考へも致しませず、ホンノお友達同士の世話ばなしで、誰樣が善いの惡るいのとお風評を爲て居る比は、お顏の立派な、姿の高等な方をお賞め申すとは、女御の常でありませうが、扨て、一生の緣を定めますると云ふ塲合に至り、終身を托するに付て、何方を擇ぶかと申す時になりますると、女は決して男子方の顏色容貌などに重きを置くものではありません。これは、中々男子方のお氣のつかぬほど眞面目なものであります。夫故、女が自分の緣談に就きて擇びまする時には、容貌は二の次にいたします。ソンナ譯でなく、ホンノ、好き嫌ひの感情を自由にして、たゞ無責任に男の方を撰び分けます時には、どうしても立派な方の方に引かれます。例へば、おつき合をするとか、ないし、靑年を引立てるとか申す塲合になりまして、極々無慾で居りまする時などが、反つて容貌の美くしい方に、フイト氣を引れますものです。夫故、余程、浮氣か乃至馬鹿なものでありませねば、お顏を第一にして緣を定めるものもありますまいが、其外の塲合に於て、知らず〳〵美男の方に氣を引れますからコヽが女の心得で、チヤンと氣を引しめて不公平な扱をせぬように爲て參らねばなりませぬ。外國から來らした御婦人などが、書生をお扱かひになる所を見ますると、男女に限らず、兎角、美くしい書生をのみ可愛がられる樣で、之はまた存外、無遠慮なものです。其事を見まして、私などは自分で時々赤面するともあります。

◉シエークスピアで御座い升たか、甘まく申したではありませんか。女は、男の男らしき所を好く、其の能く戰かふ所に好くとか申しますが、眞とに左樣かと存じます。西洋人の諺にも、女は、黑いチヨツキか、赤いチヨツキを好くと申しまして、說敎でも爲るか演說でも爲さいますか、先づ人の上にお立になる高等な方で、黑いフロツクコート、黑いチヨツキを着せらるる男子を好くにあらねば、其次は、赤いチヨツキを着らるる軍人を好くと申します。軍人を好くのは、女の特色で、男は能く戰かい、女は男の能く戰かふを好くもので御座います。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

光瀾之觀

奥　遂

嗚呼道之動也（道者即貴神之生命而有性有情有體有用）而誠（道之性情貫動靜）而善靜靜而善動動而不撓（其不撓者存厥靜也）善其靜者貫厥動其動者存厥靜體圓（圓猶滿而日圓者蓋無不圓也乃雖厥方者貫息而亦爲圓矣）而用開（無不開而化爲自新成新永遠維新）惟於眞人實全乃爲貴神之生命矣人未能見其全體也然能就其用而窺厥眞（苟不就其用而動于厥動則終不能入生命矣）則所謂於吾肉體將見神者亦可期焉已矣夫貴神之生息者自內而達外莫所不至又自外而進內莫所不入靈適而神合二而成一此乃生三（第三氣息在人最高而健）然而人之所以能致開新恒久不已者其存于貴神之所樂焉而息輪旋迅轉變化精妙而莫不神靈者也矣耶（快樂生息之靈逝妙用乃爾嗚呼貴神之所快樂者人之所以復生于萬世而不已也而世悲慘白滿者何也）以至誠而無不善動者眞道也（復言）（人重其用矣生之所以爲活者常在于其善動）道之誠也者貫通于中外而健働于間實（間實謂實而有間乃眞實之間也非虛間健働者眞人之働動而不撓者乃惟一眞働也）動（道無不動）其暖焉而爲靈火（生命之火）動其明焉而爲光明動其淸焉而爲活水動其生焉而爲眞愛其實體備而厥用無所窮極矣見者在明（見者之官則在明靜而時動）醒焉而悟（乃爲觀）天明（有雲有色有宮有城進退惟光闌闌以律無所不明）氣淸（天運無運溫風氣雖欲不淸得乎）一貫動靜維時溫風起而光明爲瀾（神氣生息靜而善動動而不撓至大無不達至小無不入感而深厚愛而公博自生進生繼之者善也不復見）（死者美也大發滅私親眞愛勝俗情宇宙同人病者獨哀嗚呼光瀾光瀾其觀何如中外無所不爲瀾上下無所不爲光）眞人在陰靜焉而餘音多福小童弟兄於是乎含厥我而相携（共同愛敬如一人）嘐々然快樂遊動（一遊一樂）（皆動于動）嗚呼是何觀也（虛乎實乎眞乎假乎見者以爲如何）光明有瀾同人以洗心

大母の女訓

大母の女訓に云く、婦人獨り婦人の道を知る、敏捷なる者は、私己の陰密なる意志を以て能く其夫の感情を左右し得るを知る、女性は決して私己の權謀を承認するものならず。

又云く、女に三種有り、一は婦德有るもの、二は惰落なるもの、三は奸智なるもの是れなり、然に婦女の心術は深潛にして、其夫（私己の慾情未だ滅びざる中）は、其配偶の果して良婦たるか、其果して奸智たるかを知る能はず。

善人は惡人よりも之を知り難し、蓋し惡女と惡男とは、其間諸事互に放つて比較的隱す無し、然に狡猾なる婦人は、善良なる男子の前に於て深く私己の奸智を隱し、堅く鎖して開くなし、故に其夫と雖も其婦の果して如何を探知する能はざるなり、此れ惡女は社會の大敵たり、此れ啻だ男子の敵たるのみならず、又女子同姓の大敵たり、世に善性なる婦女の或は終に罪過に陷るを致すは、其始め精神的必ず此惡婦の隱謀奸策に因らざるは無し、此の惡女は魔術を以て惡男の情慾を嗾ひ、之を煽動して善婦良女を誘惑せしむ、故に女子の爲に尤も恐るべき大敵は惡婦なり、女子の大强敵は其同性に在り。

故に德を修め道を踏み以て神に事へんと欲するものは、第一、宜く其精神を淸く聚めて、以て惡女の惡心と戰ひ之に勝たざるべからず、誠に神に事へんと欲せば、必ず寧靜に己れを持守し此して深く人の見ざる所に於て神に禱り以て神の爲に衆惡總惡と大戰すべし、宜く忍耐善戰以て大勝に至るべし。

第二、又警戒して男子の慾情に對し、奮戰して之に勝たざるべからず、男子の慾情の醜穢不潔なるを惡んで神に於て之と戰ひ勝たざるべからず。

是故に子女よ、宜く靈心を貧ふし、無我を期し、而して積極的に天母天父に勸むべし。

又云く、善良有德なる婦人の其夜眠より寤めて其氣其體頓に衰弱せるを感覺する如きは、此れ世の惡婦人の惡靈其邪法魔術を以て生命の血氣を夜中彼れの睡體より竊み絞りて取り去れるものなり、不見の邪氣其の勢此くの如し、警醒せざるべからず。

又云く、女子其修養の進むに及べば、男子の誘には能く勝を制すべし、唯だ其强敵たる奸惡に女性と戰ふは誠に難し、女

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の男を惡むあれば、之を惡む事單純なり、婦人の其同姓を惡むは、極めて重複なり、女子の男と戰ふや、猶ほ手を以て戰ふの間を隔つ有り、其女子同姓と戰ふに及では、其生命の原水に於て激伐亂鬪す、故に眞に女德を修めて神に事へんと欲するものは、男慾を以て敵とし之と戰て之に勝つべきは勿論、而して又常々惡女の慾情邪心の最も其强敵たるを覺知して之と戰鬪せざるべからず、故に頭より足に至るまで、胸となく腹となく、餘地間地を有せず、五躰內外を合せて天母天父に奉獻し、而して神力に依て此の大敵に勝ざるべからず、全心總身自分を以て自分の生命と爲すなく、斷然眞神の御旨意に一任して、造次も日常必用を離れず、以て神事に勤勞すべきなり。

又云く、僞善者に對し尤も警醒せよ、世の婦女の交際は、其空氣常に雜駁、誠に安靜ならず、婦人の會合は、常に秘密の私計に陷り、多くは邪鄉に伴ふ、其集會するや、眼前に男子の居る無きを喜ぶ、女姓の會するや、自由放任の魂膽を取る、彼等自由に自分を放任す、然れども若し目前に男子來れば大いに異にす、古より男子は未だ女子心魂の有樣を其儘に發見したるものあらず、若し男子之に近くあれば彼等は殆んど別人の如く裝ふ、其氣色を飾りて男子に逢遇す、如此會合は甚だ危險なり、女子等自身に其善性を滅す地に陷るを致す、男子中にも亦如此種類有り、併し彼等は比較的表面にして女子の深く其衷裏を貫くが如くならず、故に善く神に事へんと欲するものは、先づ超然として此の惡世を斷ち昇り、專ら道に由て高く踏まざるべからず、男となく女となく、若し世の僞善奸惡と伴ふて相交れば、必ず其毒氣邪魂の襲ふ所となり、心腦皆な闇昧に化し、復た光明に感じて神の悅樂に樂む能はじ、遂に生命の勢氣其身に滅亡するに至る、謹まざるべからず。

故に無用の客をば拒絕すべし、訪問は必ず有用の事にして而る後ち之を爲せ、言葉は宜く簡短にして淸潔に而して感謝に富むべし、長座して閑談空話する勿れ、人に善書を與へて讀ましめよ、大勝の後ち悅樂圓滿なる日に及べば、我儕快然大聚して時々盛會を擧げむ、今や時未だ至らず、故に混合して雜談する勿れ、僞裝を作す勿れ、僞善に陷る勿れ、宜く人を敬すべし、之に狎るゝ勿れ、人を愛するの道は相勉め相扶け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て其人をして善に進め神に事へしむるに在り、愚痴凡情の交りを以て愛とは名くべからず、宜く自ら堅く持ち以て唯だ神の命に善く從ふべきなりと、

雜録

美極經濟論

青柳有美

日本の婦人樣たちほど優くしとやかにして愼み深きは無し。客に招かれて食膳に向ふも、箸を手にすること稀にしてたゞ僅に膳面を睨むのみ、山海の珍味も日本婦人の爲には眼に入るべきものにして口に入るべきものもあらじ。されど、若し假りに日本の食膳をして西の國々の如き料理献立より成るものなりと思へ。日本婦人はなほ睨むのみにして食はざるを得べき乎。否な。否な。姫達は如何に愼み深くしとやかに優しきものにていませばとて、此くの如きは能く忍び得ることにてあるまじ。さても不思議や。客の訪れ來るものある時、粗末なる皿に世の雜菓子盛りて出せば、主人は素より其賓客まで、心置き無く手さしのべて之をつまみ食ふべけれど、もし美はしき器物に美はしく製りあげられたる色さま〲の干菓子或は蒸菓子など取揃へ、光澤よき箸にてもあしらひ出せば、是れも不思議や、粗末なる茶うけの前にはいぢきたなかりし客たちさへ、何ものにか制せられつる如く、亦たゞ之を睨むのみにして口のうちまでは運び入れまじ。是に於いてか、一と皿の珍菓は何度か饗せられ何百人にか供へられ、古るき聖者が、五つのパンと二つの魚にて三千人を饗應し昔しの、げにも忍ばるゝほどなるもをかし。

暫らく西の國々の食卓を觀よ。たゞ僅かに卓上に飾りつけたる果物と草花などにて、その寂しさを補ひ賑はせども、なべての料理献立甚だ殺風景にしてむさくるしく、初めに雞の片股を骨ぐるみにあげてゴロリと一塊皿につけたるチッキンカットレッツあれば、後にはビーフステークと稱へて、之を食はんものと刀を加ふれば肉のうちより生赤き血の溢れ出づるなどあり、仲々見る目も心地惡しく、しばしなりとも早く食らひ終らざるべからざるものゝみなり。豈に長く之をながめて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

自ら悦んで樂むに忍びんや。されど、日本の料理はたゞ味の美を重しとするのみならず、又形の美と色の配合などにも氣を用ひあれば、婦女子の如き愼み深きものは、之を口に入れて味覺を悦ばすまでも無く、眼よりその形と色の美を賞して大に樂み、食はずしてなほ且つ我が心に限なき滿足を覺え、思はず腹ふくるゝに至る。これ即はち眼にて食へるものか。美はしき菓子の、漫りに人の食らふところとならざる又同じ理なり。

夫れ料理と菓子とは食はれて始めて人を飽かしめ得るものなるに、日本の料理と菓子との特に此く食はれざるに早く人を飽かしめ得るは、たゞその美はしき故にあり。然らば、美はまた經濟ならずや。人よ、世に見せ菓子のある如く見せ料理を工夫せば如何に?。

繪畫音樂彫刻などいふは、皆な是れ人の想像に訴へて玆に始めて美はしとせらるゝものなり。而して世にこの『想像』ほど經濟なるはあらじ。昔バビロン王ネブカドネザル其妃をメディヤより迎ふ。王妃アミテス故山の風色に戀々としてバビロンの漠野を悦ばず、絶えず憂色あり。王即ちこれを慰めんとし地上三百尺の空中に高く四エークルの庭園を築く。是れ世界七不思議の一と稱せられしバビロンの懸空園なり。されど、此くの如くにして到るところに人目を悦ばしむるに足るべき好風景を實現せんとするは、甚だ容易のことに非ずして、頗る多大の財貨と勞力とを要せざるを得じ。然るに、若し『想像』の其間に活動するものあれば、一枚の布と若干の繪具とは、能く觀る者を悦ばしめてこれを美はしとせしむるに非ずや。是に於てか又た想像の美は經濟と合一するものあるを知る。人は名工の筆になれる美人畫が萬金の價あるを聞き、その高さに驚ろくべしと雖ども、實は是れ却つて價の甚はだ廉なるものなり。今假りに其の畫の如き佳美人を觀者の前に實現せんとせば、これ實に至難事なり、否な千億萬の財貨黄金を積むも、人は遂に之れを作り得べからず。實物の佳美人は實に價額以上の價額を有するものなり。天使の如き又た萬金を積むも遂に人界に求め得べからず。然れども、想像は同じくたゞ僅に布と繪具とに依りて巧にこれを現じ、觀る者をして其の美に醉はしめ得るに非らずや。天地の造物神にして、若し、此くの如き天使を人界に翔けらしめ、又た佳美

人と好風景とを多く至るところに造り得るとするもその煩らひや大にして宇宙力を損すること誠とに少なからざるべし。然るに、想像の祝福に縁りて布と繪具とは、至るところにこの佳美人と好風景を捕へ、又た人界に得難き天使を現ずるに至る。豈に是れ天地宇宙の經濟ならずや。

演劇の美の如きも同じく經濟に合一するものなり。若し劇に現はれたる事情を事實に現じ、以て大いに人を悲しましめ大いに人を悦ばしめんとせば、爲めに千萬金を以てすら償ふべからざる人命を犧すこと一日にして實に數人ならざるべからず、國の一端より他の一端まで旅行せざるべからず、數十の家屋と嵯峨たる城廓伽藍とを忽ちにして火にせざるべからず。しかも毎日これを續けて演劇の興行日數なる二十日間に渡らば、その財貨を損し人命を損すること、遂に幾何たるを知るべからず。然れども、演劇によりて人の想像に訴たふれば、たゞ僅かに俳優と大道具等とに依るのみにして、此くの如く財貨と人命とを損するに非らずんば容易に得べからざる感動を人に與へ、或はこれに泣き或はこれに悦こばしむるを得べし。是に至れば、人は團十郎一と興行の給金七千圓乃

至一萬貮千圓なりといふを聞いて驚ろけども寧しろ却つて其の廉なるものならずや。即はち知る、演劇の美は經濟と合一するものたることを。

而して、形式美とは其實これ經濟を意味することなり。今もし玆に不平均の建築或は彫刻ありとせよ。然らば、其各部分は全體に於て相一致せざるを以て、部分と部分との間に力の平均を失ない、容易に破壞せらるゝものとなるべし。假令へば、一堂の屋根ひとり大にしてその柱を細小なりとせば、忽ちにして壞るゝが如し。又た不平均なる聲音或ひは色彩の配合は、徒らに感覺を苦しましむること大にして、生理力を損すること實に尠なからず。故に、不平均とは又た不經濟の別名たり。かの平均中の平均なるシムメトリーの美の如きも、左右の力最とも能く平均し、恰かもかの玩具に所謂豆奴の如く、容易に倒れ難く随がつて破壞し難きところにあるなり。これを平易に觀するも、平均を得る四本脚の卓子にして、もし一朝一ト脚を失なふて不平均のものたるに至らば、忽まち顚倒して破壞するに非ずや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

その何物たるを問はず、總ての人が、古物のうちに一種の美を認識して之れを愛翫する如き、又た天地宇宙の經濟より來れるものにして、全たく廢法利用の一法たり。もし古物に美を認めらるゝことなくんば、古物は徒づらに朽ちて天地宇宙の間だに何の用なく、たゞ棄てられて履まるゝのみとなるべし。されど、此くの如きは甚はだしき不經濟たるを以て、天地の主宰相はその古ぶるものあるに從がつて益々之れを美化し、人を慰さめ樂しましむるの材に供し、天地宇宙の有用物たらしむるなり。なほ汚穢堪へ難き糞尿を化して穀物と野菜とに爲すが如し。また物古ぶるに從がつて其の美を增すが故に、人は何物をも粗末にせずして永く之れを愛藏保管せんとする心あるに至る。されば、古物に美あるは、是れ全たく經濟のためなりといふを得べきにあらずや。

藝術家は又た建築に所謂アーチユを以て美なる形狀と爲すが如し。然るに、力學に依ればこの美なるアーチユは、材料少なくしてしかも多量の力を支へ得る形狀なり。即はち之れによりて支持せられつゝある物質の重量は、アーチユに接して二分力に割かれ、そのうちの一分力のみ唯僅かに之れを壓するに過ぎず。然らば、美なるアーチユはまさしく是れ經濟主義の形狀ならずや。知るべし、又た美と經濟との相一致することを。

世に醜くき女を稱してオカメ或ひはお多福といふ。敢て問ふ、オカメ或ひはお多福とは何ぞや。曰く、顏の膨れてボテ〳〵せる女のことなり。顏の膨れてボテ〳〵せりとは、頰のほとりに贅肉多しとのことなり。詳しく言へば、餘分の肉附きありて經濟主義によらざる構造なりとのこゝろなり。されば、醜くき女とは顏に造作、萬事不經濟に出來上り居るをいふものにして、これに反し美はしき女とは徒づらなる贅肉なく、筋肉總て緊縮し解剖學上經濟的造構のものをいふ。是れに至れば、婦人美も又た經濟と合一するものあるを知るべし。

『色の白きは七難を隱す』ものなりとし、『萬葉』に花といへば梅といふ如く、古來より美人といへば顏色の白きことに定れるは世の常なるが、これも白粉の儉約になることとて、女の爲めには仲々の經濟なり。エマルソンは又た、修辭の美とはその言簡にして能く意を躍らしむるところにありて、建築

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の美とは無用の柱と過多の材料とを用ひざるにありといへり。もし絹布に美ありとせば、是れ些少の重量ある材料にて、多大の重量ある物質に非らずんば防ぐ能はざる寒氣と同じ温度の寒氣を防ぎ得る一種の經濟より來るものなり。濃厚色よりも淡色に美あるは、これ繪具と人の神經力とを經濟節約せしめんとする爲めにして、女持懐中時計の如く萬づ小形のもの丶、人々に美とせられて愛重せらる丶も、又たこれを製作するに用ひられし材料の少量にして、節約經濟を旨とせられあるを認めらる丶に依る。人々居常の動作の粗暴なるは醜くゝして、その温和なることの美はしとせらる丶が如き、粗暴なる動作の生活力を浪費して人躰を疲らしむること多く、温和なる動作の能く此る弊なくして、生活力を最も經濟的に用ひ得るものあればなるべし。

此くの如くにして……美極まれば遂に經濟に合一す。

某醫學女生の抱負

紹介者　某　女

婦人として醫業に志すと申升れば、人は直ちに産科婦人科が宜しからふ、小兒科が適當だ、乃至は眼科齒科だのと御深切に仰つて下さる方もあり升るが、私は別に少しく信ずる所があり升から、敢て專攻の術を高くする方針は執り升ぬ。一般内科と申す名目の下に、名醫ではなき迄も、まさかに人を殺すほどの誤診はなき準備丈けいたし升て、開業をし升たならば、堂々たる男醫の方々が術を研いて居て下さる傍に、女醫は女醫として別に働くべき場所が殘されてあるだらふと思ひ升る。

さらば庸醫に滿足して、其庸醫が何を爲すかとお尋ねになり升れば、茲にかういふ特別の働らき場所があるのです。甚だ素人臭い觀察かは存升せぬが、凡そ人間の病患といふものは、悉く生理作用の障礙から起るものであり升ふか、勿論近い原因は夫れに相違はあり升ぬ。けれ共昔から俗に、病は氣からと申すのが、抑も一理ある事で、何か心配な事があるとか、面白からぬ事情があるとか申すやうな精神の違和が、忽ちに極幾かな肉體の違和を我から大きく育て丶仕舞て、通常の場合には輕症で濟むものを、我れから求めた大病人に陷るものもあるのです。世間によくある失意の人の人事に惱

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

み盡した揚句、肉體の病氣をも惹起して、失敗の亦失敗、到底再び起つ事の出來ないものとなる事もあり升る。是れは強がち偶然の廻り合せ、泣き面を蜂が刺す計ではあり升ぬ。尤もかやうな例迚も、眞に學術的に解剖を致し升たならば、人事の惱みが忽ちに肉體の惱みとなると申すのではあり升ぬ。夫れには必らず彼れと是れとを結び合す媒介、生理作用に障礙を來す異變が必らず伴なふて來て、弱所に病氣を起すのであり升ふが、かういふ患者の病的狀態は、恰んど治癒期の患者にありては、牛乳や鷄卵なんどいふ營養物が存外の大効を奏して來る場合とは全たくの正反對であり升て、藥劑も營養物も、そんなものは悉皆背後に擱て、我れから病氣を重い方へ〳〵と提げて行く容子は、私なんぞまだ病人には直接せぬ書生の岡目には分らない事ながら、往々に見受ける事であるようです。なんぞとあまり調子に乘つて、まだ修得せぬ素人觀をいひ過升ては、脣寒き秋の風を、未來の愛顧に預るべき病家よりも、私の方へ先づ引き込まして、素養の疎らな藪の若芽が、がさ〳〵鳴り出す御一笑を買ひ求むるに過升せぬから、病理に立入るの嫌ひのある事は是で中止といたし升て、兎も角今日はまだ書生の私が見升る處では、さういふ場合が間々あるように思はれ升るから、私など何れ庸醫以上に出てぬものが開業をした曉には、さういふ或種の患者に對し、相當の慰安を與へて、側面から正面の働らきの鈍い所を補なふて行かふかと思ふても居り升るのです。普通醫師としての正面の働らきは、堂々たる大家先生といふものが別にあつて、適宜の處置を施こして下さるのですから、將來の私など、其側に立觸る事も出來ねば、又立觸るべく專門の智識ばかし研究して行く必要も認め升ぬ。今日の我國では比較的智識上の名醫が缺乏して居ると申ますのではないようです。情に於て、病人の病苦にも同感し、身邊の事情にも同情を寄せて遣るといふ仁醫が尠少いのではあり升まいか。夫れは兎に角各人働らくべき區域か違つて居てこその、用に立たぬものが、用にも立つて來る理由なのであり升る。夫故私など將來の庸女醫が執るべき方針は、醫學とか醫術とか申すものゝ堂奧に達し、如何な難病も救ふて遣るといふ直接根本の働らきは出來升ずとても、藪は藪相應の鎌を獲ものといひ升ては、お茶番めいて居るやうですが決してそんな滑稽ではあり升ぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

前にも申た或一部の患者には、普通の意味でいふ醫藥の效能を減ずべき狀態に、病苦の外の人事の苦患、即はち匙の働らきを妨害すべき雜草が生茂つて居る事もあるものですから、さういふ異狀を見出した場合には鎌を入れて、人事の雜草を刈り取つて遣る事にもいたし升たならば、存外の効を奏する事があるだらふと思はれ升る。素より或種と申ても、夫れは一般患者に對する或種であつて、其種の患者も隨分澤山にある事であり升ふから、一々多數の患者に對し、深厚の同情を寄せるとか、同感の慰安を與へて何分の同護をして遣るとか申す精神的治療が一々行き屆かざるべきものではあり升まいが、先づさういふ側面の深切心で以て開業を致し升るには、恰ど女醫が宜しからふかと思はれ升る。

勿論男醫の女醫のとて、兩性の區別から、情の濃淡に無情なる豫定を下し、かゝる患者には女醫が適當と申すのではあり升ぬ。が、人事の苦腦、精神の不安と申す併有の容躰があればとて、夫れは夫れで別に一種の症候を呈するほどの程度に上つて居ない以上は、理屈で申せば一々夫れに醫師が關係すべきものではあり升ぬ。いひ換れば獨立の病的ならぬ個人の愚痴だの煩惱だの困難だのと申すに過ぎないものであるに、たま〳〵夫れが他に患部を持つて居る病人であるだけに、治療上の一方法として、至極尤に同感もし、同情も寄せて遣らふといふ事は、恐らく理性を專とする男醫の方々の屑とせられぬ處であつて、しかも亦夫だけ不熱心でもあるだらふかと思はれ升る。夫故恰んど天然の介抱人に出來て居る婦人の醫師となり升るものなどが、さういふ方面にも心掛て行き升たならば、理外の理で治療上の効を加重して來る事もあり升ふし、且は醫術の進歩といふのが、職業的方面にも進歩して、情の趣味は次第に缺けて來る點を幾分か保護して行かれる事だらふとも思はれ升る。

縷々として說き玉ふ一種の氣焰は、後日開業の玄關に一異彩を放つべきや。其結果こそ見まほしゝ。

獨上江樓思渺然、月光如水水連天、
同來翫月人何處、風景依稀似去年。

麵麭屋開店の記

黒光女史

昨春、時の妙なは　みにて、家も暖簾も都には又と見られぬむさぐろしき一個のパン屋は、我掌中に入りぬ（學士博士等雲の如く山の如く集ふあたりに）。月に花にあたら血を湧かしたる昔の我を思へば、此急激なる境遇の一大變化に、我ながら驚かざるを得ざるなり。有美先生の所謂忘却といふこと、若し天の祝福ならば、是ぞ我には特殊の御恩惠とや云はん。なまじひ記臆といふもの丶殘りて、時々の煩悶に身心を勞さんよりは、日夜汲々としてパンの爲めに齷齪し、泣くに暇なき丈勞苦し、以てにがき記臆を滅却するを得ば、我望は即ち足れり。金を儲けんと思へばこそ、計らぬ損失も招け、初めより利害の外に一つの覺悟を持てば、さて世の中は妙なもの、誰に平つく張るを要せずして、三度のパンは無事に得らる丶も不思議なり。

開店の始め、我と幼兒のみは、物靜なる千駄木町の自宅より通ひぬ。來て見ば、良人は店に背を向けて、客の來るに心附かず。心附かざるにはあらず氣まり惡くして、躊躇せしなりき。我も亦突嗟の間に、好き挨拶の詞も浮び出でず。其時恰かも舊の主婦、物影より威勢能く、「入らつしやい」と助言を與へられたるに初めて蘇生の思ひをなしぬ。於是我は此の『入らつしやい有難う存ます』といふ掛聲を練習するの如何に焦眉の急なるかを悟り、かの有名なる太田の原は幸に人足寂なければ、朝夕往復する毎にこ丶を以て掛聲の練習所となしぬ。豫め四方を見廻はして、人のけはひあるや否やを確めつつ。されど、實際客に接しては、俄に喉に詰り、或は頓狂な調子くづれの音聲出で、中々甘くは行かぬものなり。今一つ忘れ難きは、店員初め凡の人は、我を呼でお内儀さんといひ、或人は、お前などゝいはるゝことなりき。何故か此語殊に耳立て聞え、一種いふべからざる不快の感ありき。是奥様といふ尊稱は、端なき女切れには、大に得意がらせる秘密を包めばなるべし。然れど、今は然ず、如何なる侮蔑をも大抵は呑下して、平氣となりぬ。況してお内儀さんなる名稱は、陛下と尊ばるゝよりも、猶より多の滿足と喜悦を與るに於をや。我店の重なる福の神は、大中小の學生敎師及諸官吏を初めとし、凡て中流以下の社會は、我が好得意なり。中には、腕車

を騙りて、店頭いかめしくどなり來る紳士も、文久數箇を握り來る鼻たらしも、車夫も、海老茶式部もあれど、我店には、一切平等、何れも尊敬すべき客なり。金の多少に依りて愛嬌の切賣は、我禁物の最なるもの。貴賤貧富の懸隔、我に於て何の關する所あらん、況して男女の差違をや。

我は十有餘人の店員を持てり、粗野なれ共、渡者的の種類には屬せず。彼等の或物は、常陸贔屓あり、芝居好きあり、或は滑稽湧くが如く、口を衝いて出る若者あり。配達に出づるもの、店頭に舟を漕ぐもの、ガタ〳〵ワヤ〳〵騒しきこと云はん方なし。迚も物靜かなる生活に馴れたる人の、堪へ得る所にあらず。然共、彼等は、不思議にも喧嘩といふもの一度もなしたることなし。能く義理を重んじ、互ひに朋輩の過失を辯解して、主人の目に觸れぬ樣勉むる美風は、到底我々の比にあらず。彼等は素と高等の教育を受けたるにあらず、道徳の宗教のと難かしき小理窟を學びたるにもあらず、又我は最愛の下女を吹聴せざるべからず。彼女は、勝手と工場と店との三ヶ所を持掛ちに、日夜敏腕を揮ひつゝ、生意氣盛りの手にも足にもかゝらぬ職工や小僧を、甘く掌中に操縱して聊かも不服なからしむ。其技量や實に推服するに餘あり。故に、我常に誇りて曰ふ、我店の尼將軍は、主婦其者にあらずして、此女中なりと。さりとて、我を凌駕する的の素振りは、露程もなし。實に謙遜善良なる家婢は、一家の重寶なるぞかし。而白きは我家のサッパーの卓上なり。主僕共に熱き味噌汁を啜りて、終日の勞苦を忘る、彼等の談笑是れ好酒肴なり、あゝ誰れか天國を遠き未來に求むる者ぞ。避暑避寒に贅澤を衒ふ所謂紳士淑女よ、我工場に來りて、勞苦の樣を見、或は雨の夜風の夜、營々刻苦配達に疾走する小僧を見ば、如何て其苦痛の甚だしきかを想像し玉はんも、彼等自分は、左程の悲痛を感ずる者ならず。自己の手足を勞して、健康を買ひ、愉快と滿足とを贏得して些かもつぶやくことなし。又或人は、商法は取りも直さず、虚僞の代名詞にて、只暴利を貪る奸徒の成すべき業なりと、誤解するもの世間往々にして有之。尠くとも我はしか信じて商人を視る蛇蝎の如くなりき。されど、自ら實驗して實に其然らざるを悟りぬ。虚僞と世辭を振蒔く奸商の間にも、猶ほ一片の信用の繼續するにあらざれば、殆んと運轉は中絶するに至らん。遂に、眞實は最後の勝利たる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

こと疑ひなし。故に、無意味、沒趣味の如き商法も我には利害の外に一種の興味ありて、人知れぬ微笑を湛へ得る也。

春も將に暮れなんとして、萬木の綠滴る如く、月光の美はしきに誘はれて暫らく紅塵を避くれば嗚呼誰れか蠢々たる人間界の厭はしからざる。時には物狂ほしきあやしの心に立復へり、透谷先生のお上そゞろ羨まるる夜半もあれど、明日の勞働は頻りに我を促し去るを如何にせん。

一掬の水

左琴女

誰も知る、ことし三月より、近き大阪に博覽會が開けたれば、行て看のに大業はなけれど扨觀た所て、生憎頭が大時代にて、物理の素養も、化學のはしくれも、識れるにあらねば、急ぐ事かはと、終其まゝに打過たるに、何分目と鼻の間故二ケ月も立しけふ此頃、近所合壁ほと〱行ぬ人なく、頭が時代を遠慮しければ、反つて浮めたかの如き大勢に見えければ、是ではならじと五月第三の土曜日に、丁度我と同じ樣なる、不束の頭持たる人と連立て家を出ぬ。

素より上方風俗には各種あれど、是も其一つと思はるゝは、滊車に乘りても知人の外は言葉いはず、假令先方より話しかくるも、大方は鼻の先にてあしらひ置き、われよりは假し隣席の老母腰をぬかしをりても、御氣の毒とは容易に謂ぬが流行なり、僅の時間故どうでもよき樣なものなれど、適遠方より乘り來た人は、漸く目的の地に近づきたれば、豫め土地の樣子を尋ね置んと、一言二言話しかくれば、言語を出すには、態〱器械でもかけねばならぬかの如く、大儀そうなる顏付して、賴母しからぬ答へをするなり、是等の、滊車室無言の行の開祖は誰かは知らねど、恐くは、金より外は相手にならぬの、上方氣質の摸型ならん乎、ならば之をも博覽會へと思ふ樣なり。

我と連れと、大時代の頭二ツ、各館見物したればとて、猫がお姫樣の御部屋へ入たと同じ事なれど、何分中間の多きに安心して、御幅、御琴、御札、と拜見を濟し三日目の晝も過ぬ、然れど考へ見れば、昨日一昨日、今朝より觀た事は、行ば大概かくあるべしと豫め想ひ居たる事なれば、今俄に快とも妙とも感じがたく、何か心のそこに物たらぬ心地はすれど、然

りとて餘興はさながら、田舍の祭禮の如き音がしてをれば、看る氣にもなれず、せんかたなきまゝ正門を出れば、行手の右に、嬉しくも懐しきものこそ見當りけれ。

我上士にもあらず上女にもあらぬに、不思議と道をきく事を好み、仁義忠孝それもよし、無上正眞道大贊成、聖書も常に座右左に在り、あれもよし之もよしの結果は、三教一意の心地はすれど、併正門は何所と尋ね廻り居るなり、何の故に斯く急ぎて尋ね廻るかと謂ば、正門見つかり次第急ぎかけ入り、この遣瀬なき女心を、神に佛に、つげまつりて、徜徉にさまよう悲愁の谷より、救ひ上げたまはるか、若しくは世の逆流を渡るに、あまりに纖弱き我等女性の身の内より、血と涕をとり去りて、鐵とも石とも感じなき樣、なさしめ給はらん事を願はんとてなり、夫れは餘りに無理の事と、神樣御叱りかは知らねど、然らずば、此の身にまつはる哀情をいかにせん。

兎まれ角くまれ、我の靈界を慕ふ心、片時も離れぬに歡しくも、今我前に靈の泉は、湧つゝ、流つゝあり、立寄てくみ上る處は、即ちキリスト教聯合大會 塲なり、内には廣き庭一面

に椅子をならべ、傍聽人随意に出入す、我入口にトポリと立ば、さも待たる人の來たらん樣に、歡をもて會員の婦人、我肩にかくる手をかけ、設けの椅子によらしめらる、と見れば閑雅なる西洋婦人樂器の前にありて、讃美歌二百四十四を會員信者とも〴〵唱ひをらるゝなり『ねぎとあらば』の聲聞く迄もなく、靈性の渴になやむ我は、今この内に入りて、それよ、遠境無知の旅中に於て、突然故舊にあへるが如し、三十分を境にして内外の宣教師更る〴〵說教あり、素より會は廣くすゝめんの注意なるべければ、說かるゝ所は、佛法ならば小乘と中程の高さなり、聽者の多くは此教を初て聞たかの如き人多ければ、丁度この位が至極ならん、立更り入更りしてこの熱心なる宣教には、多くの人が、天地萬有の根原なる、活る神に接する時機をはやめるなるべし。

何はともあれ、一般物質的營利的なる博覽會 塲裡にありて、こゝに淸らかなる別天地を造り、人々をして、人に靈あり、世に神ある事を覺らしめ、今日よりは、明日よりは、眞實人道の唯中を、歩まんものとの麗しき決心を、起しめんの眞情より。 隨分長き此頃の日の夕方なるに、倦たる色なく孜々と

して勤めらるゝ、諸會員の精勵には、感謝の心も深く／＼發りぬ。

今この一掬の水にて、前のものたらぬ心地はいつしか忘ぬ、去りとては思ひかけきや、斯る所に、靈性の泉滾々として湧あらんとは。

薩摩琵琶行

（西幸吉氏の談）

今は昔し文祿の役、我軍韓地に留まると前後七年、將士身を忘れざるにあらねど、さすがに家を思ふとなきにあらず。況してや、家に居て遙かに戰雲を望み、相思を孤雁に托して漠々の天に恨む妻婦子女に於てをや。時たまツヨとの知らせありて而も我軍捷を得たりなど聞ゆる時んば、郷士擧つて狂へる如く、宛がら大酺の天下に許されたる如し。此際、酒林肉池のさゞめき偶として法外に逸し、怪しからぬ振舞などするもの多かりしより、扨ては薩摩藩領土に於て、樂曲に取締を爲し、聲歌音謡の樂しみを潔よくせしめんとぞ計られける。

此頃、禪僧に文史と云へるしたゝかものありて、白樂天が琵琶行に思ひより、人間盛衰の理はりを見して、良俗善風の礎をつくり、かねて雄烈沈痛の樂調を行はらせんとし、盛んに琵琶をぞすゝめける。琵琶行れて、俗樂暫らく止み、武人の家の子女等、之にあらねば留守居する人に不相應しからぬものゝ様に思ふに至りき。驚ろくべきの感化なり。

必竟、此の感化の泉源は、禪僧文史が非凡の皷吹によれり。此僧、出處を知らず、又、之く所を知らず。左れど、常に政機の樞密に關知せしよしにて、藩主折々其堂に參じ、人を退けて公案に聞くの狀なりしは、全く政談の旨にありしとか。文史此時木魚を叩き、一棒を揮つて殿が眉間に喝するとなどあり、勢力恐ろしきものなりしとぞ。

之が因みにて、藩内の寺々は其後暴れものゝ感化所となり、大凡そ手に合はぬ我儘ものは皆な寺に預けられ、寺入と稱して其感化を蒙むりしとぞ。

文史、晩年に曰く、我は祇園精舍に徃くべきもの也と。或る時忽然姿を沒し、行く所を知らず。

旦夕更樓上　　遙聞橫笛音

獨嘯錄

無笑

○多く讀書したることを誇るものは、如何に多くの旦那を持てるかを誇る妾婦の如し。

○大抵の學者は、足下にあるものを擔ぎ上て雲の中に入れ、之を糢糊曖昧にして喜こぶもの也。

○先入齊は輕薄才子に多く、後入齊は臆病ものに多し。

○權利と云ふもの、善と云ふものは、自然にあらず、抵抗力の名なり。

○女の美くしさは、其飾る所にあり、能く飾る所にあり、即はち芝居にあり。

○英雄とは、無敎育のワンパクものを言ふ。

○學者に種々あり、屑ひろひ、張つぎ、門つけ、流し、講釋師等なり。

○事業家とは、をもちやを善く弄そびたる子供の成人したるもの也。

○餘り善意に解釋し過る約束は、夫婦の契約なり。斯種の約束が大抵惡感情を以て了るは、素人の約束の如し。たゞ半分しがたき子供が出來れば之によつて繋がる。

○內閣を讓ることを好まずば、連りに仙人を尊敬すべし。民間の名士イヤ〱乍らも仙人となり、政治を輕んずべし。

○演說の初に、諸君よと言ふものは、冒頭よりウソ也。

○脈を握つて初て診斷する醫者が、觀相察神の人を笑ふは、握飯あるを知つて、風味を知らざるに同じ。

○百姓の兒は、紙鳶を上ることを好む。鳥さしの子は、スミレを取ることを好む。一仰一俯の變なり。

○坊守の人生觀は、死人觀なり。看護婦の人生觀は、病人觀なり。

○道德とは、人の造りたる製作品中、尤も巧妙、尤とも有力なるもの也。而して、其の更に自然的に、彌よ更に有力なるものは、宗敎也。左れど、二つ乍ら製作品たることを忘れざるに至つて初めて可なり。

○製作は、虛僞に非ず。其材料、其材料の調合、其合和、其の効力、皆な自然に隨はざるべからざると、勿論なり。

○自然に自然らしく隨ふ、只是れ自然なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○檢校山登萬和

五月廿七日、谷中妙行寺にて、檢校が柩の前にて讀みける。

檢校惣別當山登萬和先生の柩の御前に、辱知巖本善治謹んで告す。大凡そ一藝一道の奥に達し、其玄妙に樂しむ人は天才なり。天之を生み天之を育くむ、人生の重寶之に及くものあらんや。萬和先生幼きより箏曲に耽り、二六時中彈琴を休むとなし。年十六にして擧然として名あり、早く已に檢校惣別當の榮職に上らる。之より門下來學の輩、算ふべきにあらねど、先生黄白を輕しとし藝道を重しとして、容易すく許さず、徒らに虚榮盛名を賣るを中心の恥とせり。此を以て廣く先生を知る者は多からずして、深く先生を敬まふものは少なからず。われ一度び先生を見てより、其寡慾恬淡の德に服し、又其朗唱高歌を聽てより、凄然として忘れがたく、之よりして深く推服し措くと能はざりき。夫れ音樂の尊きとは東西古今の人夙に唱へて止まず。古の聖賢は之を以て敎化政治の要道とせり。蓋し人心を塵穢の外に遊ばせ、煩腦迷執の羈を斷ちて、妙法善美の境に逍遙せしめ、直ちに頑夫を廉に、懦夫を勇にして、又心なき人をも忽ち物の哀れに泣かするもの、たゞ音樂にあらずや。左れば、世人の音樂を重んずるは言ふを待たず、身既に音樂を以て任とする人々は、宜しく自尊自重して其天職を敬すべきならずや。然るに悲しきは、世人遊興の末に趨り、樂を見るにたゞ末技を以てす。之はた世の人の誤にはあるべけれ共、樂界の人自から重んぜざるも亦一の過ならずや。此際、萬和先生、毅然として任じ、生平洒々落々、諧謔百出の間と雖ども、峻峭の氣嚴然として充ち、時に欝然として爆發す。稜々たる俠骨、時あつて萬丈の氣焔となるもの之が爲也。先生の自から任じたる重しと云ふべし。若夫れ一度び先生の唱歌彈琴に聽き、仔細に其態度發情に注意し、深く其修養せらるゝ所に察すれば、先生の斯道に於る眞に玄妙に入れるを見たり。先生の箏に對するや、慈母に近づくが如く、之を撫するや乳を探るが如く、其歌ふや、慈母の傍に歌ひ嘻々として同もに樂しむが如し。一點の邪氣、一點の覇氣、寸心の虚榮、分毫の功名なし。先生は箏を以て樂しみ、箏は先生に抱かれて鳴る、而して朗々たる美音天外より來り、磬金玉の轉ぶが如く、神鈴の振ふが如く、黄鳥の囀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

づるが如く、陰蟲の吟ずるが如し、而して、其幽所、切所、一髮千鈞を曳くの所に至れば、聽くもの將に絕息せんとす。此時先生自から彈ずるを忘れ、自から歌ふを忘る、無想無念、たゞ自からにして然るが如し。嗚呼是れ天下の逸品にあらずや。吾等、曲了り歌熄んで而して後ち、久しく其聲を忘るる能はず、屢ば囘顧して長く耳邊に音響を耳く、而して今や斯人溘焉として亡び、死せる遺骸眼前に橫つて將に之より土中に入らんとすれども、流風余韻尙ほ耳目の邊にさまよひて、幽明の分れを知らず、先生の德何ぞ如此く隆なるや。昔しは太田錦城、山田檢校の歌を發して曰く、其聲嫋々醞藉、凄婉にして幽峭と、又其品性を敍して曰く、聰慧にして溫柔、胸襟豁達、物と忤ふとなしと、此言何ぞ宛から後の萬和先生の爲に言ひたるものの如し。先生、內君子の資を稟み、德一道の師たるに足りて、而も人を視ると極めて溫柔、極めて恭謙、其終に臨んでや、夙く命を知り、靈覺平安なり、先生の修むる所深しと云ふべし。夫れ、昔しは山田檢校あつて箏曲部門に勃興せり、今もし萬和先生の余韻に從ふもの、其自任自重に學び、斯道を重んずると共もに之を樂しみ、深く無我の聖境に入つて、以て俗塵煩惱の人我を拂はゞ、先生逝くと雖ども亦先生の弟子ある也。而して吾等一度び先生の琴の音にきき、先生の美聲に泣きたるものは、假令ひ忘れんとするも、寧ろ長久へに忘るべからず。其魂天に還り、其魄地に歸すとも、先生の靈や永遠存せり、人誰か之を忘れんや。墓邊の松天籟を奏で、雨露滴々として和する時、先生の墓に詣するもの、其聲を念はん。先生が死の床に侍べり、其枕頭に鳴りたる風琴は、今數ば同じき曲を繰返せり。先生が日夕愛撫せる數面の箏は、風加はつて亦自から泣く、先生の遺子、先生の弟子、之に接して先生の余韻を聽かん。先生莞爾微笑して可なり。

辱知善治謹んで弔す、尙はくは饗けよ。

カーライルは、英雄なり、勝海舟なり。

カーライルは英雄なり、文士にあらず。もし文士も亦た是れ英雄なりと言へる彼が主張よりせば、彼を文士と言はんも差支へなきに似たれど、通常、人の呼做す如き意義に於ては、彼決して文士にあらず、一個の英雄なり。

英雄とは何ものぞ。皮相を透觀して眞相に入り、天地の第一義に固く信じて、誠實眞摯なるもの即はち是れ也。彼が古今の人物を評論し、天地人生の活義を穿つや、形式は腐れたる箱の如く破れ、律法は廢れたる繩の如く斷れ、眞諦實相、火を睹る如く明瞭々として、燦然、其眼に映ず。

但だ其の文章の如何にも迂曲し、語路の如何にも重複し、斷岸の絶句、望んで其淵を測らしめず、寸言、針の如く刺して而も直立し、谿流、叢の下に隱れて如何にも其の通ふ所ろを人に見めさゞるより、渠が文章は、只だ解しがたきものと言ひ囃さるるを常とせり。

然れど、其の解しがたきは、文字の故にあらず、又彼はわざと斯る文體を撰びたるにもあらず。大凡そ、悟道達觀したる生命の意見を、可成く周密に言ひ現はさんとするものは、勢ほひ斯の如き文體に於て斯の如く切りに新字を作りて、其所懷を盡さゞるを得ざる也。彼が迂回せる長言語は、其の悟を解き明かさんとて也。彼が急喝短切せる小偈語は、其悟を在のまゝに吐出せる也。もし悟道を聞くに慣れたる耳を以て之を開かば、カーライルの文章ほど分り易きはなし。意會心識して、默契合點せしむると、彼の文の如く濃厚なるは、少なし。誰か其文を難解なりと言ふや。

偶然思ふヿあり、勝海舟先生の談話を聽きて、不得要領なりと言へるものゝ多かりしは、先生の悟入に聞かずして、罵嘲に笑はんとせし故也。もし久しふして其語調に慣れ、其意義に熟するに至らば、心を以て心に通ずる閃電神化の名句、言々皆な活くの感ありしなり。カーライルの文を讀む、亦た之に似たり。

若し海舟先生をして、維新前後の活劇に當らしめず、初めより晩年の氷川翁として只だ其の清話をのみ語らしめば、宛然東洋のカーライルたりしならん。カーライルをして若し維新前後に生れしめば、或ひは幕末の安房守たりしならめ。われは此の二傑に於て甚だしく似たる所ろあるを見る。而して其の似たる所は、同もに英雄にして、英雄の見地より人事天地を自在自由に評論せしとの事、これ也。

〰〰〰〰〰〰〰

世の中を何にたとへんあさびらき
こぎゆく舟のあとなきがごと。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

武邊老人雜話（一）

●榊原健吉は、上野の彰義隊一件に、榊原家の藩士が山下で激戰した所から間違られて、其後大和な評判に爲ましたが、稽古は、極無器用な方でした。上段から卸しては、フソリフソリ振り動かし、又上段に冠ぶると云ふ方で。夫に、力でやつた方で、ワザが無器用でしたから、年をとると直に下りました。逸見宗助などは、之と逆つて、技が上手でしたから、幾歳になつても、下りは爲ませんでした。然し、山岡鐵舟サンは、極、榊原が苦手で、どふ云ふものか、夛はいつも榊原に及びませんでした。

●山岡先生は、確カナお稽古で、いつも眞劍勝負と云ふ所を爲さいます。夫故、夛は極惡るい方で、よくお負でした。九州邊からなど上つて來るものがあると、アチラは、すばしこく、ソイッと小手などを取つて、お小手！と言つて、一度も迴つて居ります。山岡先生は「成程ッ、まいりました」と言つておやめですが、あとで、其人に向つて、成程、私が負ましたッ、然しお聲ねするが、小手をお打なすつてから、一度もぐるりッとお迴りになる、アレは何の爲です乎と問はれた。夫で大いに赤面したものもあると申します。

●山岡先生はもと千葉の門人で、一刀流でしたが、後に、一刀ではまだ宜しくない、刀を賴まないと言ふ所から、無刀流と云ふのを初められました。

●今ま學習院の先生を仕て居られる新貝と云ふのは、島田の弟子で、もと肴賣でした。肴を賣に來ては道場をのぞいて居るので、夫から弟子入をせられたのですが、島田の奴と言つて餘程高名なもので、實に達者なものでした。新貝は民谷流ですが、一躰民谷流は、居合や形斗りで仕合と云ふものは無かつたのですが、新貝サンなどは、其後にせられたのです。

●仕合と云ふものは、長沼司郎左衛門と云ふ、直眞陰の先生が、明和の比から初められたもので、其時から初めて稽古道具も出來たのです。然し、極近世迄で、お面などは餘程丈夫でしたが、喉のタレはありませんでした。お突と云ふものは無つたのです、

無邊風月眼中眼

女子實學園創業義捐金募集發起人

女子實學園ハ去年六月初メテ世上ノ有志ニ贊助ヲ請ヒタリ。然ルニ左記ノ貴婦人ハ直チニ起ツテ之ニ應ジ、六月下旬東京音樂學校ニ於テ前後二日慈善音樂會ヲ催ホシ、收入金圓ヲ寄セテ、寄宿舍及ヒ敷地ノ購入ニ便セラレタリ右發起人ノ芳名ハ如左。

公爵岩倉具定君夫人	岩倉久子
公爵一條實輝君夫人	一條悦子
伊澤修二君夫人	伊澤千代子
原六郎君夫人	原富子
原亮三郎君夫人	原禮子
濱田玄達君夫人	濱田すて子
堀江半兵衛君夫人	堀江てい子
穗積陳重君夫人	穗積うた子
穗積八束君夫人	穗積まつ子
保利眞直君夫人	保利久子
豐川良平君夫人	豐川やす子
伯爵戸田氏共君夫人	戸田極子
伯爵大隈重信君夫人	大隈綾子
侯爵大山巖君夫人	大山捨松子
子爵岡部長職君夫人	岡部坻子
門野幾之進君夫人	門野駿子
子爵香川敬三君夫人	香川須磨子
片山東熊君夫人	片山照子
高木兼寛君夫人	高木富子
	棚橋絢子
子爵田中光顯君夫人	田中伊與子
	武田錦子
團琢磨君夫人	團よし子
相馬永胤君夫人	相馬隆子
	津田梅子
侯爵鍋島直大君夫人	鍋島榮子
日下義雄君夫人	日下清子
山本達雄君夫人	山本たほ子
	矢島楫子
	安井哲子
子爵松平直平君夫人	松平久子
男爵松平正直君夫人	松平須磨子
子爵松前修廣君夫人	松前藤子
公爵近衛篤麿君夫人	近衛貞子
	後閑菊野子
阿部泰藏君夫人	阿部優子
淺野總一郎君夫人	淺野さく子
佐藤進君夫人	佐藤靜子
	佐方鎭子
佐々木政吉君夫人	佐々木よし子
侯爵木戸孝正君夫人	木戸すゑ子
	清藤秋子
	三輪田眞佐子
三井三郎助君夫人	三井すて子
子爵三島彌太郎君夫人	三島かれ子
島田三郎君夫人	島田のぶ子
公爵島津忠濟君夫人	島津田鶴子
	下田歌子
進十六君夫人	進道子
森村市左衛門君夫人	森村菊子
公爵毛利元昭君母堂	毛利安子
男爵千家尊福君夫人	千家俊子

女學雜誌大賣捌　東京 東京堂　西京 勉強堂

明治三十六年六月十四日印刷
明治三十六年六月十五日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（電話番町千一番）
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍（電話新橋十八番）

豫告　次號は七月十日發行す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十六號

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可

（明治卅六年六月十五日發行）

（五一六）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十六號

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可

(明治卅六年六月十五日發行)

(五一六)